

中国語インテンシブプログラムポリシーの構築⁽¹⁾

秦 耕 司

1. はじめに

長崎県立大学が独立法人に移行するのに伴う教育課程などの改革が実施されるなかで、経済学部では英語と中国語を特化するクラスの開設が決まった。語学力の「即戦力」を備えた人材の養成を求める県の要望に応えたのである。しかし大学の授業で即戦力を養成するのは諸々の点で無理がある¹⁾。そこで実践運用能力の養成を目的として、大学教育に適合する形を考えるべく、高度な実践力へ到達するにはどのような教育を施したらよいか、それを実現できるインテンシブ教育の全体像を練ることとなった。インテンシブ教育は目的がはっきりしているので、従来の第一外国語とは違い、単に必要な科目を揃えるだけでなく、一連の科目群が相互に関連を持って相乗効果が出るように、カリキュラム等中国語の教育課程全体を工夫しなければならない。目標を設定し、教育方針を立て、カリキュラムを編成し、教材を研究開発し、授業方法を工夫するなど、プログラムの全体像の構築が求められるのである。幸い経済学部には第一外国語クラスでの長年にわたる中国語教育の経験がある。時間的な制約に追われながらもインテンシブ教育の素描を試み、「中国語インテンシブコースの構想²⁾」を公表し、第一期中期計画ではこの構想に基づいた教育指導を実施してきた。

その後この全体構想をどのようにより具体化し発展させるべきか、学生の反応と習得状況を基に試行錯誤を繰り返しながら、絶えず更なる構想を考えていたのであるが、昨年8月のFD研修において、立命館大学教育開

発推進機構の沖裕貴教授による講演「Diploma policy に基づく体系的な教育改善について」に触発されたことにより、構想に進展が見られるようになった。

本稿は、第一期の構想の下に教育指導を展開した6年間の経験をふまえて、2010年7月に日本学術会議から発表された「大学教育の分野別質保証の在り方について」および沖教授の講演を基に、中国語インテンシブプログラムのプログラム・ポリシーを構築せんとする試みである。以下、プログラム・ポリシーを略してPPと記す時もある。

2. 中国語インテンシブプログラムのポリシーを必要とする背景

中国語インテンシブプログラムは、特定の目的の下にプログラムを組んで、その目標を掲げて開設された中国語教育プログラムである。したがってプログラム教育ではその目標を達成しなければならない。その目標達成に関連する全体の教育設計がプログラム・ポリシーである。

本学では、学士号授与の単位である学科別にディプロマ・ポリシー(DP)を策定中である。しかし上述のように、本学経済学部の中国語インテンシブプログラムが、特定の目標を掲げてプログラムを開設し、その成果を法人評価委員会に報告し評価を求めている以上は、プログラムのポリシーを策定し、それに則って教育・指導を進めるのが筋であろう。ましてや文部科学省から「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」と題する依頼を受けた日本学術会議の報告書の付録にある「大学教育の分野別の質保証のための教育課程編成上の参照基準について 趣旨の解説と作成の手引き」において「分野別の質保証を図るための基本は、各分野の教育課程(学部・学科・コース等)の『学習目標』が、十分な具体性を備えた形で同定され、その学習目標を効果的に達成するという観点に照らして、実際のカリキュラムが編成されることである。」と、コース等を位置付けていることから、コースもしくはプログラムは、一つの教

育課程として在るべきであろう。現に中国語インテンシブプログラムは、目標実現のための方針をかがげ、その基にカリキュラムを編成し、教材を研究開発し、授業を工夫しながら試行錯誤をしているのである。しかしまだポリシーとしての機能を果たすだけの条件が揃っていないのが現状である。目標達成の基準を明確にし、全体的および将来への展望を見据えた評価を可能にするために、プログラム・ポリシーの策定が急がれる所以である。

法人評価委員会の委員は、所属先が本学ではない人によって構成されているので、その意味では一定の一般性、客観性を有しており、同委員会から評価を受けることは、プログラム・ポリシー策定の基本的な理由である。したがって、非専門家より構成される評価委員会をして、実態に即してより公平で客観的にかつ将来への発展性を備えた評価を可能ならしめるためには、プログラムの教育目標に到達する方針や方向性と評価の基準が必要である。その裏付けのない評価は、プログラムの趣旨、方針、内容、特色および現状を誤認し、将来への発展性に支障をきたすことになりかねない。PP構築の基本的な理由とする所以である。

しかし目標を掲げて教育をしている限り、ポリシー策定の理由はもっと一般性のある対外面、および常にプログラムの実効性を検討し改善を図る実質的な面でも求められるべきであろう。その理由は三つある。

1. 社会的理由、対外的理由

大学は社会的な存在であり、学生は大学の教育課程を経て一定の学力、能力を身に付け、社会人となる。社会 特に大卒資格者を採用しようとする企業にとっては、どの教育課程でどのような学力、能力を身に付けたのか、関心があると思われる。

またこれから大学に入って学業を修めようとする高校生およびそれを指導する高校教師や家族にとっても、どの教育課程に入ったら自分の望む学力、能力を身に付けることができるのか判断できるだけの情報を欲している。

四年間という期間授業料を徴収して人材養成の教育をしている大学は、それらの人たちの要望に応えなければならない。教育内容を解りやすく説明することによって、高校側の進路指導もより適切に行うことができるようになり、入学後の学習意欲減退などの根本的な問題も解消できる方向に向かうことが期待できる。

2. 对学生説明

学生がそれぞれの中国語科目について、それを受講することによって、どのような学力、能力がどの程度身に付くのか理解でき、最終目標を念頭におきながら、段階別、科目別に具体的な目標を持って、どのように学習をしたらよいか自覚しながら学習に取り組むことができる。またどの程度力がついたのか、ある程度自分で客観的に判断できる。

3. 授業改善、カリキュラム改善の基準としての役割

PPを設定する意味は、教師側の要求に偏ったり、逆に学生の実態に妥協したり、また担当教師によって基準や方針が異なることにより生じる学生の混乱を防ぎ、客観性と一貫性をもって最低共通の実力(学力と実践力)を養成することにある。担当者がそれぞれの基準で判断評価をするのは、実力養成という視点からであるにせよ、学生の立場から見れば、評価にバラつきがあっては、自分が身に付けた実力について確信を持つことができなくなる危惧がある。これではプログラムが求める人材を養成することは難しい。客観的な評価を可能にするためには、プログラムとして一定した到達評価基準が必要である。

PPの構築は、中国語インテンシブプログラムで学習した学生の一定の能力を保障するものとして、对学生に対してはもちろん、第三者に対しても、説得力のある説明ができるものとして、大きな意義を有する。

3. 中国語インテンシブプログラムの定義

インテンシブ教育とは、外国語学部、文学部以外の学部の学生を対象と

し、専門を問わず高度な外国語能力を身に付けた人材を養成することを目的とする外国語集中教育である。

本学経済学部の中国語インテンシブプログラムは、経済の知識と中国語運用能力を身に付け、卒業後に中国語を用いて仕事をする人材の育成を目的とし、その中国語教育の部分を担うものである。この目的はプログラム教育を実施する上で、その基本的な方針や方向付けをするのに重要な前提となる。したがって、プログラムの目標を掲げ、その実現に向かって達成を保障できるプログラムの教育方針を立て、カリキュラムを編成し、教材を作成、編集、選定し、授業内容を設定し、授業方法を工夫した教育・指導を実施しなければならない。

ここで中国語を用いて活躍をする場面をいくつか挙げてみる。いちばん多いのはビジネス界であるが、後述のように、地方行政機関においても機会は増えつつある。

- 1．現地に駐在する。
- 2．現地に出張で赴く。
- 3．日本で通訳、翻訳をする。
- 4．日本で中国人を受け入れ協力する。

中国語インテンシブプログラムが求めるのは、中国語による高度な実践運用能力である。実践能力を身に付けるにはそれを支える基礎力を必要とする。基礎力のないところに応用力は育たない。高度な実践力を求めるほどより高度で幅の広い基礎力を確実に習得し、それを強固にすることが求められる。学校教育は、眼前の目的を直接達成するための教育を施すところではない。応用力へと確実に発展する基礎力を養成するところである。外国語教育における基礎力とは、基礎学力と基礎技術力の総称である。

基礎学力と基礎技術力は必ずしも明確に区別をすることはできない面があるが、本プログラムでは一応の目安として、つぎのように分類をしておくことにする。基礎学力とは、音声、文字、語彙、文法に関するその特徴

を含めた知識および中級レベルの読解力であり、基礎技術力とは、正しい発音ができる力、正しい発音を聴き取る力、中級・上級レベルの指定文章を流暢に音読できる力、ネイティブスピーカーによる中級・上級の授業において中国語による授業が70, 80%以上聴いて理解できる力、中級・上級レベルの指定文章をスラスラと黙写(原文を見ずに文字で書くこと)できる力、日常生活について作文したり話したりする力である。

そこで経済学部の中国語インテンシブプログラムを次のように定義する。

中国語インテンシブプログラムとは、目的と目標を掲げ、教育方針を立て、その方針に則って応用力に発展する確実な基礎力の養成・習得を主眼とする中国語教育プログラムである。

中国語インテンシブプログラムの目的と目標は次の通りである。

プログラム開設の目的：卒業後に中国語を用いて仕事をする人材を育成する

プログラム教育の目標：中国語による高度なコミュニケーション能力を養成する

また中国語インテンシブプログラムは法人評価員委員会の評価の対象となっており、一定の成果が求められている。我々はこのことについてきちんと対応しなければならない。そのためにもプログラム・ポリシーを策定し、プログラムの目標や方針に沿って、どのような成果がどの程度達成されたのか、将来への発展が望めるような評価ができるようにしなければならないのである。中国語インテンシブプログラムとはそのような性格を持ったプログラムである。中国語能力のごく一部の狭い範囲での知識と記憶の正確さを測る試験の結果を、人材養成の到達度と混同し、あたかもそれが習得した語学力のすべてであるかのような評価が出されるのは客観性を欠いており、正しく公平な評価とは言い難い。評価は、多角的視点と総合的視点からの評価、および将来への発展へと繋がる評価であってこそ教

育的評価として意味のある適切な評価となるのである。

4．中国語インテンシブプログラムの意義と位置付け

中国語インテンシブプログラムは、長崎県立大学においてどのような意義があるのか。経済学部においてどのような位置付けになるのか。最初にそれを明らかにしておく必要がある。この2点を明らかにしてこそ中国語インテンシブプログラム教育が大学として必要な意義ある存在となる。中国語担当の教員や中国語インテンシブクラスの学生の個々人の希望や目的を超えた、大学として普遍的な意義と価値を有する存在となるのである。

以下この点について簡単に述べておく。

1．長崎県立大学で中国語教育を重視する意義

長崎県という日本最西端の地にある中央から遠く離れた地方の大学に、中国語教育を重視したプログラムが開設されたのは、歴史的背景、地理的背景、時代的要請および本学経済学部の中国語教育の歴史など、諸々の条件や要因が重なったところにある。

鎖国政策を堅持していた江戸時代、長崎は唯一対外的に開かれた窓口として中国、オランダの二国と細々ながらも関係を維持していた。長崎および九州には中国との関係を示す史跡が数多く現存している³⁾。長崎といえば、江戸時代唯一の対外窓口の交易港としてのイメージが今なお強く残っていて、地元では中国に対する関心が強い。また国宝の崇福寺を初め長崎三福寺はすべて中国人による創建である。

門戸を開放した明治以後は、地理的な条件より長崎経由での中国との往来が盛んになっている。戦後中国と国交が回復した後、九州で最初に中国との航空路が開設されたのも長崎である。また今年(2012年)の3月には、長崎 上海間の航路が復活され週1、2便の運航が予定されている。

現代においては、地方のグローバル化と中央政府からの権限の地方移譲が進む中、地方都市の対外関係の活動も活発化している。長崎県では早く

も1982年に県レベルで福建省と友好関係を提携しており、県内の各市が福建省の都市と姉妹関係を締結しており、交易はもとより、文化交流、行政機関の交流、学校教育機関の交流など、その分野は多方面にわたっている。また上海や北京では、長崎物産展なども積極的に催されている。

このような現状の下、長崎県の設置する県立大学で中国語を重視した教育を実施するのは極めて自然で、長崎県の特色としてはもとより、地方大学の特色としても意義のあることである。専門課程である中国学科もしくは中国語学科ではなく、経済学部中でのインテンシブプログラムこそ、むしろ大いに長崎県下の経済学部としての特色を出すことができよう。中国語インテンシブプログラムが、本学の特色の一つとして位置付けられる所以である。

2. 経済学部における位置付け

中国語インテンシブプログラムは、卒業後に中国語を用いて活躍する人材を育成するプログラムとして、つまり経済の知識と中国語による高度なコミュニケーション能力を身に付けた人材を養成する教育課程として開設されたプログラムである。

従来外国語科目は長年にわたって一般教育科目として三分野に並立する形で8単位以上の履修要件として開設されていた科目であった。高度な外国語教育は外国語学部と文学部が担ってきたのである。それが大学をとりまく時代背景と社会環境の変化により平成3年度に大学設置基準が「大綱化」され、一般教養課程が解体された。一方外国語を必要とする状況は時代とともに高まる傾向にあって、ここに専門、学部の如何を問わず、高度な外国語能力を養成するインテンシブ教育が提唱されるに至ったのである。本学にインテンシブプログラムが開設されたのはこのような時代の流れ

社会環境の変化、大学における教育課程の変化、さまざまな専門課程における高度な外国語運用の能力を持つ人材養成の必要性 に沿ったものである。インテンシブ教育はその出発点からして外国語の実践運用能力を具えた人材の養成を目的として生れた教育課程である。国際化とグロー

バル化が常態となった現代の対外関係において、国際関係を推進する人材がビジネスマン、文化人、行政関係者、教育・研究者、学生など多方面にわたっており、中でも長期の中国駐在と常時出張のビジネスマンが急増している現実と、全国の地方行政機関で国際交流課を開設し、そのほとんどが中国と交流関係を提携し、活発に交流活動を実施している⁴現状からすれば、経済学部にも中国語インテンシブプログラムを設置する意義は、改めて言及する必要のないほど当たり前のことと思われる。

3. 経済学部における中国語教育の経緯

経済学部では開学以来一貫して外国語教育を重視してきた歴史がある。中国語は第二外国語として必修8単位、選択4単位、計12単位で4年次まで履修できる配置であった。第二外国語としても、2年次の中級必修科目である会話の担当は、一貫してネイティブスピーカーであった。また1977年には中国語学科を設置しようとして検討委員会まで組織したことがある。諸々の事情で学科としては条件が整わず、第一外国語として設置されることになり、1983年に開設に至り、第一外国語として実績を積み重ねてきた経緯がある。この時日本人の専任教員を1名増員し、ネイティブスピーカーの教員を非常勤講師から常時学生指導のできる身分の安定した嘱託講師とし、中国の大学から招聘することになった。これに伴い、1983年という早い時期より本学特有のオリジナルな海外語学研修を実施し、今日まで一貫して続けているのは、全国的にも珍しいであろう。第一中国語はもちろんであるが、第二外国語であっても卒業後に仕事で中国語を用いて活躍している卒業生は少なくない⁵。また県内の高校からも高い評価を得ている⁶。経済学部における中国語教育は、長くて存在意義のある消すことのできない歴史を有しているのである。

以上述べたように、本学経済学部にも中国語インテンシブプログラムを開設するのは、伝統ある本学の中国語教育をいっそう充実発展させる意味で大きな意義があると言えよう。本学において中国語インテンシブプログラ

ムが占める位置は決して小さくはない。

5. 中国語習得に必要な各技能の位置付け

中国語インテンシブプログラムの目的は中国語を用いて仕事をする人材の養成である。つまり本プログラムにおける教育・学習の目的は実践運用能力の養成・習得である。しかしこれは完成された中国語能力をもって卒業させるということではない。仕事を初めとするいろいろな形態における中国語の実践活動を通して、失敗や成功の試行錯誤の経験を積み重ねることによって、より確実な意思疎通ができる、有用で相手に対して説得力のある中国語運用能力を身に付ける基盤となる基礎力を習得して卒業させるということである。ここで最大のカギとなるのは、中国語らしい表現が理解できる感覚を身に付けることである。つまり、この日本語を中国語にはどう訳すか、という視点ではなく、このような場面でこのような気持ちを伝えたい時には、中国語ではどのように言うか、この感覚が理解できる素地を付けること(身に付けることではない)を念頭においた教育・指導である。文脈や場面を離れて、この日本語は中国語でどう言うか、という翻訳練習は日本語的な表現法から脱却できないため、話す中国語が流暢であればあるほど、コミュニケーションには却って障害となる語学力を身に付けることになるのである。そのような点を踏まえて、より高度な実践運用能力へと発展可能な基礎力習得に焦点を当てた教育・学習上の各技能の位置付け、および比重は次の通りである。

先ず中国語運用実践能力を習得する上で必要な技術、能力を教育・学習の順に述べると、発音、読解力、文法知識、音読力、作文力、聴く力、話す力である。もちろんこれは理論上整理をするとこの順になるというのであって、実際の教育・学習においてはこれらの中からいくつかを組み合わせ、平行してかつ繰り返しながら、螺旋的にレベルを上げながら進めるものである。

発音力 発音はここに挙げた7つの技術、能力の中で最も基本的な基礎の基礎となる要素である。

正しくしっかりした発音は、高度な会話力養成に不可欠な音読力の基礎としてはもとより、聴く力、作文力、読解力の基にもなる重要な要素である。会話力習得のための最も基礎となる、最も基本的な技術力が発音力である。発音力は、実践運用能力の基礎要件である。中国語は発音の習得が極めて難しい言語であるので、入門期の発音編段階での指導だけでは全く不十分で、上級段階まで発音指導を念頭に入れておかねばならない。

読解力 中国語を活用、運用する語学力を身に付けるには、それ相応の中国語をインプットしなければならない。母語は生まれた時から一定の年齢に達するまで具体的な場面を通して耳から始まって口真似をしながら受身姿勢で覚えていく。文字言語を中心として主体的な学習が始まるのは、小学校に入学してからである。教科書を用いたいろいろな科目の授業が始まって小学生たちの会話の内容は急激にレベルが上がり、内容に幅ができる。自分の目の前にはない場면을想像しながらの会話ができるようになるのである。大学生として外国語を学習習得するには、具体的な言語環境のない中で、段階的、系統的、効率的に主体性をもって意識的、自覚的に学習をしなければならない。外国語教育・学習にとって参考になるのは、幼児期における言語習得の状況ではなく、学校教育が始まってからの段階的、系統的、体系的な教育・学習である。作文力も、聴く力も、話す力も、読解力と読書量で決まる。テレビやDVDを利用すれば聴く力も話す力も一段と向上するが、これも読解力の基礎があるからこそそれが可能なのである。加えて、所謂四技能の中で、最も短期間で、最も学習に費やすエネルギーを必要とせず、最も高いレベルに到達でき、最も大量に中国語をインプットできるのは読解力養成の教育・学習である。したがって読解力に最も比重を置くのは、教育・学習上最も合理的である。読解力を養成するカリキュラムとしては、中国語を正しく理解する精読を根幹とし、中国語に慣れるために、なるべくたくさん中国語をインプットする多読を加え、さ

らに他の科目でも読解力の向上を図ることができる教材を開発し授業を工夫すれば、インテンシブ教育としては申し分のない教育、指導が展開できよう。

音読力 こうしてインプットをした中国語を実践力へと発展させるのは音読力である。音節や単語単位の発音を如何に正しく発音できても、文章となると途端に発音が不正確になったり、不明確になるのは誰にでもある普通の現象である。加えて文章の音読には、強弱、緩急、抑揚、イントネーション、ポーズのとり方、感情表現など総合的な音声の表現力が必要である。音読力がなければ中国人には聴きづらいし、聴いても解らないことも珍しくない。これは語学留学や語学研修で現地を踏んだことのある学生たちが等しく口にするのである。実践力にはこの音読力が非常に大きな役割を果たすのである。

読解力は、実践力の潜在力である。その潜在力を顕在化させるのが音読力である。読解力と音読力を併せて実践運用能力の第一要件とすべきであろう。また語義や文構造など語学的理解と内容理解のできた文章での音読練習は、読解力の向上および作文力の向上にも有用である。授業を通して音読力養成の指導をするのは、中国語インテンシブプログラムの目的、目標を達成する上で欠かすことのできない教育上極めて重要な指導項目である。

作文力 語学力をみるには作文力をみよ、とされているように、作文力は語学力習得上非常に大事な教育・学習項目である。それは読解力が与えられた文章を理解する力であるのに対し、作文力は自分で外国語を生産する力であるからである。

中国語の実践運用能力を身に付けることは、中国語の生産能力を身に付けることである。中国語の生産能力を確実に身に付け発展させる学習方法は作文練習である。それは、音声言語は生産する端からその場で消えてなくなるのに対し、作文は文字で書くので、後で確かめて修正をすることができる。正しい中国語、自然な中国語表現の感覚を身に付けるのに最も有

用な学習、練習方法であるからである。文法習得の目的を兼ねた単文と複文の反訳練習にしる、あるテーマの下で一つのまとまった内容を持つ文章の反訳、黙写練習にしる、応用力へと発展させる基礎力の養成には最もふさわしい練習方法である。その基礎の上に立って自由作文へと進めば、その分効率よく作文力の基礎を造ることができる。

作文力に音読力があれば、それを基礎として幅広い発展性のある会話力を身に付けることができる。作文力は実践運用能力の第二要件である。

以上、基礎要件と第一要件、第二要件を併せたものが実践運用能力養成の基盤条件である。

聴く力 会話文なり文章なり、音声言語を聴いて解るのは次の場合である。

1. 単語や諺、また慣用表現などを知っている。
2. 文法理解があって文を理解できる。

以上は文章で用いられている単語や表現を予め音声でインプットされていることが前提となる。したがって聴く力は語彙力、読解力、音読力に比例してより高度で幅の広い内容の中国語が聴いて解るようになる。

3. 未習の単語や表現でも文脈によって類推や想像で解る。

中国語は漢字を用いており二音節語が圧倒的に多い。日本語には音読みによる日中同形語が多いので、日本人にはこの点が有利に働く。

4. 内容に関する知識があって理解できる内容である。

語学力だけでなく、幅広い知識や想像力、類推力などの養成が語学力向上に大きく関わっている。実践力の養成には非常に大事な点で、これを見落としてはならないであろう。

聴く力養成の教育・学習は、以上4点を踏まえて授業内容と授業方法を工夫すべきであろう。

実践運用能力の養成に聴く力の教育・学習を欠かすことができないのは当然である。しかし上述のように、聴く力が語彙力、読解力、音読力を基盤としている点、および聴く力は、中国語そのものの力の向上よりも、不

慣れから慣れることによって向上する面が強い点を考慮すれば、聴く力は十分条件であり、実践運用能力習得の第三要件と位置付けるのが妥当であろう。ただ聴く力を養成する教育・学習は、音声によるインプットであるので、話す力への即効性および音声表情の面においては、文字言語によるインプットよりも効果は格段に大きい。音声によるインプットは、読解力と音読力の向上に比例して話す力を向上させることができる極めて実践向きの教育・学習項目である。

話す力 話す力は、インプットしている中国語を組み直して、音声で生産する力である。話す力は読解力と読書量と作文力を基盤とした音読練習の質(正しい発音と正しい発音で速く読む練習)と量、および聴く力の質(音声表情の習得度)と量により決まる。つまり話す力は各技能を下敷きとした最終段階、仕上げ段階の練習である。会話力は、外国語実践運用能力の基礎要件、第一要件、第二要件、第三要件を基盤とする語学的総合力である。会話をこのように位置付けてこそ応用力へと発展する基礎力の養成が可能となる。安易に会話中心のカリキュラムを組めば、狭い範囲では流暢な会話力を習得できたとしても、話題性のある高度な会話力となると却って伸び悩むことになりかねないのである。

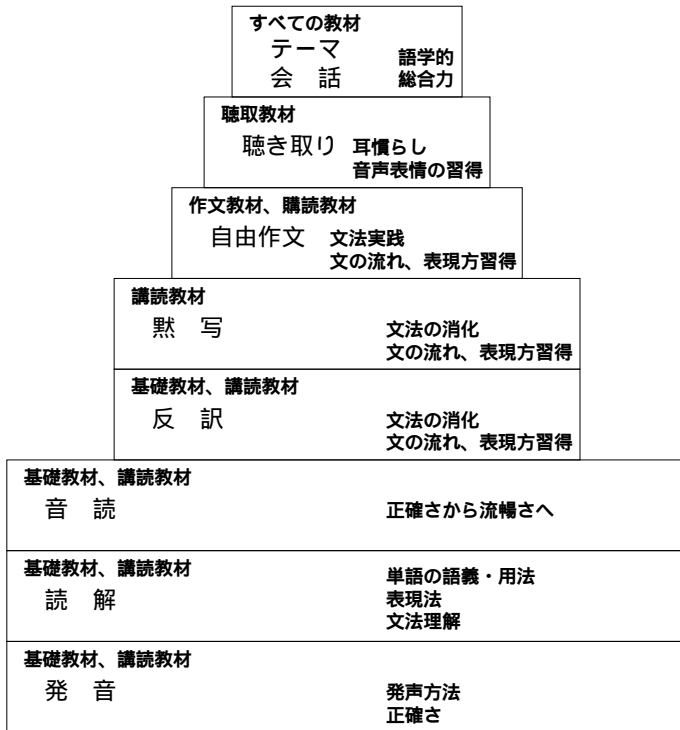
まとめ 会話力と語学教育・学習の二面性

上述のように話す力は各技能を基盤とした音声による生産力である。会話力は読解力、音読力、作文力、聴く力という四つの要件に話す力を加えたものである。つまり会話力は総合力である。この理解と認識を有するかどうかによって、カリキュラムの編成が大きく変わってくる。各技能の位置付けと教育・学習にかかる比重は、インテンシブ教育にとって極めて重要である。従来は講読、作文、会話などそれぞれ独立した並列関係の授業科目であった。インテンシブ教育では、単位認定の制度としては独立した科目であるが、インテンシブ教育の目標を達成するためには、すべての科目が関連をもって相乗効果的作用により高度な会話力養成へと収斂されるよ

うにカリキュラムを編成し、授業内容と授業方法を工夫すべきであろう。

最後に各技能の習得上の位置付けを一覧表で示しておくことにする。

技能位置付け関係図



語学教育・学習にはレベルアップを図る教育・学習による実力の向上を目指す項目と、慣れ不慣れの項目で練習によって実力習得を図る技術項目がある。項目によっては、両分野に属する項目もある。

1. 教育・学習によりレベルアップを図る項目
読解力、音読力、作文力、聴く力
2. 慣らす練習で習得する項目
発音力、音読力、聴く力、反訳、黙写、話す力

6. 学習目標について

学習目標には、技能別学習目標と科目別学習目標の2種設定しなければならない。技能別学習目標については、発音・音読の目標と作文の目標はすでに学生に配布している。発音・音読の目標は本学経済学部の論集の前号第3号に掲載したばかりであるし、作文の目標も論集に掲載の予定であるので、本稿では割愛することにする。中国語のPPが完成した時には改めて収録するつもりである。

科目別の目標は、まだ具体的な形での完成には至っていないので、筆者が担当している科目の教科書に掲載している関係部分「まえがき」等を転載することにする。筆者が担当している科目は5科目であるが、そのうちの対4年生開講の科目以外は、すべて筆者の作成または編集によるもので、当該教科書の作成、編集の主旨や意義を学生に理解させるべく、「まえがき」にその教科書作成の意義や目的また学習方法や試験問題と出題意義まで説明しているからである。ここに転載するのは、初級の2クラスと中級および上級のそれぞれ1クラスの計4クラスである。

科目別目標

1年初級

科目名：イ) 中国語Ⅰ 初級総合

教科書：『中国語総合基礎』

はじめに

外国語を学ぶには、初級の段階が非常に重要です。初級の段階でしっかりと基礎力をつけておかなければ、その後の上達は難しくなります。基礎力をつけるには、教科書が非常に大きな役割をはたします。1に教科書、2に教師、3に辞書と言われているのもそのためです。

私たち一般人が外国に出向いて相互交流を行ったり、現地で生活をする

のが珍しくない今日、外国語は単に理解するだけでなく、私たち一人ひとりが身につけなければならない時代に入っていると云えましょう。外国語を身につけるための学習方法は、「習う」だけでなく「慣れる」方式が適しています。そのためには豊富な例文に触れ、それを繰り返し声を出して練習することです。本教科書では、会話文とやさしい文章の他、同類の文法用例をたくさん用意しました。そして、単語にしる、文法にしる、一度出したものは、後の課で繰り返し出てくるようにしました。本文が長くて文法用例が多いのは、

1. 中国語を理解しやすくする。
2. 単語や文法、文型を覚えやすくする。
3. 中国語を身につけやすくする。

そのためです。単語の用法にしる、文法にしる、初心者には用例が多いほど理解は容易になります。文章が長いから難しいのではありません。分量が多いから難しいのではありません。その逆です。このことは、ちょっと考えてみればすぐに納得のいくことです。それでこの教科書は「習って慣れる」方式に徹しました。

中国語は漢字という非表音文字を使用しています。それで従来の教科書にはピンインという日本語のルビに当るローマ字が本文に併記してありました。そしてそのことが、却って肝心の漢字の発音を覚え難くするという障害にもなっていました。

中国語は、単語が変化をせず、文法関係は語順によって決まります。そして、どのような意味を持った単位とどのような意味を持った単位が結びついているか、ということがポイントになります。ところが、本文にピンインを併記すると、そのために単語を分ち書きしなければなりません。そしてそのことが中国語の理解に弊害をもたらしているのです。

この教科書は、中国語本来の姿に立ち返り、本文からピンインを取り去り分ち書きをなくしました。その代わりにページごとに新出単語のピンインと意味を提示しました。また予習のポイント欄を設けて、個々の単語の

意味と連語や文の意味もしくは訳を提示し、中国語のポイントである単語の結びつき方を理解しやすくしました。新しい試みです。この教科書は中国語を身につけるための教科書です。単語の意味や文法的知識の記憶を中心とした、受験用の教科書ではありません。この教科書を使用するに当たっての目標は、次の3点です。

1. 本文の音読。発音が多少荒削りでも、ある程度すらすら読める。
2. 本文の聞き取り。録音を聞いて本文が書ける。
3. 本文の反訳。本文の日本語訳を見て、中国語に訳せるようにする。

以上です。単語の使い方や文法の正しい知識は、会話をするにしる、文章を作るにしる、中国語を自分で生産しながら覚えるのが、もっとも身につく方法です。外国語は、上級レベルに達しても初級レベルの間違いをすることは珍しくありません。要は、間違いを恐れずにどんどん実践することです。

中国語の教科書だから、中国のことを内容に盛り込んだ楽しい教科書にする。それもひとつの考えです。しかしこの教科書は、先ず自分のこと、身近なことを多少の間違いはあっても、中国語で話したり書いたりできるようになることを目標としました。中国語を身につけるとは、中国語が自分の力で再生産できるようになることを言います。「聞く、読む」という受身の力だけでなく、「話す、書く」という相手に働きかける語学力を養ってこそ、相互理解と相互交流は可能になります。現地に行けばもちろん、日本で外国人と交際するにおいても、この原理は変わりません。内容を自分中心にしたのはそのためです。中国に留学さえすれば中国語の力はつく、中国語の力をつけるのは中国に行ってから。そういう考えは間違っています。現地での学習効果を上げるには、現地に行く前にどれだけ語学力を身につけていたか、それがカギになります。間違いを恐れず、どんどん中国語を生産する実践こそ大切です。

語学力を養うには「語感」を養うことが大切です。「語感」を養うには音読が効果的です。本文はもちろん、文法用例も大きな声を出して繰り返し返

し音読して下さい。同じ音読でも、いちばん効果があるのは、朝食前の音読です。中国の大学では、朝食前に1時間外国語の音読が課せられています。中国の学生たちが日本語を学び始めて1年にもならないのに、かなり話せるようになるのもここら辺りにカギがありそうです。みなさんも、しっかりと声を出して練習し、1年後にはこの教科書が、手垢にまみれ、ボロボロになっていることを期待しています。学習者のみなさんが、この教科書によって、きちんとした基礎力と中国語の「語感」を養われるように希望しております。そして、いつの日かみなさんと、中国のどこかで思わぬ出会いがあることを楽しみにしています。

科目名：イ) 中国語Ⅰ 初級閲読

教科書：『中国語 閲読の基礎』

はじめに

外国語学習の必要性、特に実用語学の必要性が年々高まって来ている中で、大学における外国語の必修単位はむしろ減少しつつあるのが現状です。このような状況下にあって、学校教育における外国語教育はどのようにすべきでしょうか。学校教育だからこそできる教育。それはしっかりした基礎教育です。教育時間が少なければ少ないほど無駄のないしっかりした基礎教育をしなければなりません。今の中国語教育界、つまり中国語教科書の出版状況を見ると、安易に会話中心に流れる傾向が強いように思われます。語彙数も少なく、文法事項も少なく、表現力も乏しいだけでなく、発音すら十分身に付いていない初級段階で会話に重点を置くのは、教育・学習に費やした時間の割には収穫は多くありません。それよりも、やさしい文章、馴染みやすい内容、中国語作文にモデルとなりうる文体の文章で読解力と作文力を養うことです。読解力がなければ聴いても解りません。作文力があればより高度な会話力が身に付きます。ですから、初級教育は、文法、読解に音声教育を加え、さらに文章作文をも視野に入れた教科書が

重要な役割を果たします。この教科書はそのような主旨で作成しました。

中国語上達の秘訣は発音の習得にあります。早目にピンインをマスターし、そしてピンインから脱却することです。その目的を達成するために、本文から漢字とピンインを切り離しました。学習者のみなさんは、漢字部分の本文を音読できるようになるのを目標に日頃の学習に励んで下さい。また本文をモデル文として、中国語の作文練習をして下さい。きっと他の教科書では得られない会話力が身に付くことでしょう。しっかりした基礎力(基礎学力と基礎技術力)を身に付けておけば、会話力は会話の本と実践を通じて独学できます。しかし、会話力だけでは読解力や作文力は付きません。本文の文構造と意味を理解した後で、音読学習を繰り返し、反訳による作文練習をすれば、高度な実践運用力の確実な基礎ができます。

もうお分かりでしょう。これは閲読用の教科書ですが、会話の基礎力を身に付けることも目的としています。この教科書がボロボロになるまで音読練習と作文練習をされることを期待しています。

作文練習の基礎 反訳

この教科書の本文は第4課からやさしい文章になっています。まずこの文章を日本語に訳して下さい。そして中国語の本文と日本語の訳文の対訳形式のノートを作ります。作文練習は次の手順でします。

1. 訳文の日本語を中国語に訳す。
2. 訳した中国語を本文に照らして、間違ったところを訂正する。
3. もう一度最初から訳文の日本語を中国語に訳す。(2度目は間違いがかなり少なくなっています)
4. 同じように中国語を本文に照らして、間違ったところを訂正する。
5. 間違いがなくなるまで「1」「2」の作業を繰り返す。

このように、中国語を日本語に訳し、その日本語を再び中国語に訳すことを、反訳と言います。反訳練習は、作文力の基礎だけでなく、応用力を付けることもできます。また、もともと日本語である文章から訳した不自

然な中国語ではなく、中国語らしい自然な文章を作文する感覚を養うことにもなります。教科書だけでなく、いい文章や名文など、いろいろなモデル文でこのような練習をして下さい。そして、その文章がしっかりした発音でスラスラ音読できるようになれば、それが会話力へと発展します。

録音教材について

この教科書には著者による本文の録音があります。録音は、初心者向けにしたゆっくりした速度と、普通の速さのものとの二種あります。まずゆっくりした速度の録音で、口を大きく動かしながら腹から声を出し、一字一字しっかりと音読練習をして下さい。次にゆとりがあれば、普通の速さの録音で耳を慣らして下さい。初級段階ではしっかりした発音の基礎を確実に作るのが大事です。基礎ができる前に口先だけで速く読むのは控えて下さい。

2年中級

科目名：イ) 中国語Ⅱ 中級精読

教材：『中国語中級講読』

はじめに

中国語インテンシブプログラムの目的は、中国語による高度なコミュニケーション能力を身に付けることにあります。この精読の授業と学習は、その目的を達成するための重要な手段です。

会話力や作文力を身に付けるためには、それ相応の中国語をたくさんインプットしなければなりません。そのためには先ず中国語を正しく読む力を必要とします。しっかりした読解力の養成と中国語の感覚を磨くのがこの精読の目的です。また「黙写」は、中国語の文の流れの感覚をつかむための学習方法であり、作文力はもちろん、文脈より意味を読み取る感覚を養うにも、非常に効果のある学習方法です。

この教材の中国文を「黙写」によって身体で覚え、それに音読を加えて消化すれば、相当程度の会話力を身に付ける素地ができます。**中級は、しっかりした基礎学力と確かな基礎技術力を習得する極めて重要な段階**です。常にそのことを意識しながら学習と練習に励んで下さい。1年後にはきっと自分でも驚きをもって実感できるだけの実力が付いていると思います。

それでは、実践運用能力を養成するインテンシブプログラムで、なぜ古い時代を題材とした教材を用いるのでしょうか⁷⁾。

1949年10月中華人民共和国が成立して以来、ずっと中国共産党が政権を担って来ました。しかし、近年の改革開放政策と経済発展により、イデオロギー色は急速に希薄になり、それと共に中国の伝統的な文化、思想、価値観等が見直され、その重要性が増しています。加えて中国の国際的な地位が高まるにつれ、世界の国々でも中国の歴史や文化の研究が盛んになって来ました。このような状況にあって、歴史を理解し歴史知識を持つことは、コミュニケーションを営む上でとても大切なことです。

しかし、歴史物語を教材とする意味はそれだけではありません。中国は長い歴史を有し、高度な文化文明を築いて来ました。社会構造や人間関係、価値観からくる中国的なコミュニケーションを理解するには、歴史知識の多少が大きく係ってきます。

現在中国では、歴史物語を題材にした連続テレビドラマが数多く製作されており、DVDで簡単に入手できます。歴史ドラマに見る人間関係やコミュニケーションのとり方は、現代ドラマでは見られない有益な場面を、いろいろと耳にし目にすることができます。歴史ドラマは、中国語コミュニケーションのあり方を学ぶこの上ない宝庫です。テレビドラマをよりよく理解し、中国語表現の感覚を磨き、自分のものとして消化するためにも、歴史になじみ、歴史知識を豊富に知っておくことが大事です。

歴史物語を教材とするのは、高度な運用実践能力の習得を目的としたものです。

中級精読と学習方法について

中級では、本格的な文章により読解力を養うだけでなく、漢字だけの文章を音読できるようにすることも、重要な目標の一つです。音読は聴く力の向上にも大きく拘わっています。しっかりした語学力（読解力と実践能力）の基礎を養うのは中級です。中級段階では、初級で学んだ基礎力（基礎学力と基礎技術力）を固めながら、より幅の広い、より高度な基礎学力と基礎技術力を習得します。

中級では、基本的な文法事項や様々な意味関係よりなる連語、また複雑な構造を持った文などが豊富に出てきます。**中級は、語学力養成の中心であり基盤**です。それは実践的で高度な運用能力を身に付けるために、その前提となる読解力と音読力と作文力を養い、中国語の感覚を磨く上でも非常に重要な段階だからです。基本的な基礎力養成は中級で一段落します。日頃の予習と復習でしっかりした基礎学力と基礎技術力を身に付けて、中国語の輪郭や特徴なども解るようにして下さい。

この授業の目的は3つあります。

- 1．本格的な中国語の文章を読んで、文法理解と内容理解を併せて読解力の基礎を養う。
- 2．反訳と黙写を通して中国語的表現の作文力の基礎を養い、高度な会話能力の素地を造る。
- 3．漢字だけの文章をしっかりした発音でスラスラ音読できるようにし、会話力実現に近づける。

これらの目的を達成するために、日頃より次のような学習を心掛けて下さい。

- 1．単語にしる、文章にしる、常に声を出して読む習慣をつけて下さい。
- 2．ノートには、本文、ピンイン、単語の意味、日本語訳を、それぞれ

れ別に書いて下さい。

3. 試験は、日ごろある程度きちんと学習をしていれば、誰でも高得点を取ることができるような問題です。それは単に中国語の知識を問う問題ではなく、スポーツや楽器演奏と同じように、**どれだけ技術力を身につけているかを真正面から確認する問題**だからです。(試験の目的と問題)
4. 試験問題と、それに合せた学習方法は、中国語インテンシブプログラムの目標実現のための極めて確実な方法です。

試験の目的と問題

定期試験に出題する問題は、前期、後期ともに次の通りです。

1. 発音(多音字)
2. 黙写
3. 听写(聴き取り)
4. 読解
5. 固有名詞とそのピンインおよび聴き取り
6. 成語、諺、その他
7. 音読

「黙写」とは、原文を見ずに原文を書くことです。つまり音声による暗誦を、文字であることを言います。「黙写」をすることにより、作文力の基礎を養います。「黙写」は反訳と違って媒介となる日本語がありませんので、**中国語の文の流れ(思考回路)を身に付ける**にはいっそう効果のある方法です。日頃「黙写」の練習をする時は、文の流れを意識しながら必ず声を出すように心掛けて下さい。この「日頃声を出す」ことが会話力へと発展する大きな要因となります。**試験は、授業で身に付けた読解力と音読力を確実に自分のものとして消化し、中国語再生産能力に転化させる為に行います。**

3年上級

科目名：イ) 中国語Ⅲ 上級精読

教材：『中国当代故事集錦』

上級の学習方法について

インテンシブプログラムもいよいよ上級になります。高度な読解力を習得し、中国語の確かな基礎力を身に付け、それを強固に固め、自分の能力として応用力へと発展させる力を付けるのは上級です。その重要な手段の一つが、まったくの漢字だけの中国語の文章を辞書を頼りに意味を調べるという作業です。このような上級の学習を通じて、中国語に関して自分で自分の世界を切り開いていくことを実感できるようになります。予習において、今までより数段しんどい思いをしながら、しんどいなるが故に、しんどい経験を通じて、徐々に手ごたえと、楽しさと、面白さと、そして何よりも中国語の香りを感じるようになります。上級は、インテンシブプログラムの仕上げのクラスであると同時に、自分自身の中国語の世界を創り上げていく出発点でもあります。この精読と実践経験を積み重ねることによって、百パーセント自分自身によるオリジナルな中国語の世界を切り開いていって下さい。

この授業の目的は5つあります。

1. 単語の意味を自分で辞書を引いて調べ、確実な読解力を能力として身に付ける。
2. 高度な中国語の文章を読んで、語学的な意味だけでなく、内容把握まで含んだ読解力を向上させる。
3. 漢字の発音を自分で調べることにより、漢字の発音に対して勘を養う。
4. 反訳と黙写を通していっそうの作文力を養う。
5. 漢字だけの文章をしっかりした発音で音読できるようにし、会話力

実現の幅を広げる。

試験問題

1. 黙写
2. 読解
3. 成語
4. 文法, その他
5. 音読

(注)

- 1) 例えば次の点である。
 1. 即戦力を養成する授業では基礎力が付かず, したがって応用力も付かない。
 2. 時間的, 言語環境的に, 一定レベルに達する即戦力を養成するのは不可能である。狭い範囲での会話力に終わる可能性が高い。
 3. 即戦力養成の授業は, 大学教育として相応しくない。大学での教育は, 実践力へと発展するしっかりした基礎力の養成に主眼を置くべきである。
- 2) 「中国語インテンシブコースの構想」(『学長裁量教育研究論文・報告集』) 2007年5月 実際の原稿はインテンシブコースがスタートをする2005年以前に提出をしていたのであるが, 諸々の事情で出版が遅れた。
- 3) 『九州の中の中国』九州と中華人民共和国新聞社編1983年
- 4) ヤフー検索による日本国自治体国際化協会北京事務所作成の「日中友好都市提携状況一覽(日中)」によれば, 中国と友好関係を提携している都市は全国47都道府県の全部に, そのうち都道府県レベルでの提携は34 区市町村レベルでは304に及んでいる(2011年1月末現在)
- 5) 「中国語で活躍する卒業生」(『中国語インテンシブプログラム紹介』)
- 6) 「長崎県立大学について県内高等学校の教員から寄せられた意見」平成21年7月7日 教育研究評議会資料
- 7) 現在はより現実的な効果を考えて現代の説明文を題材としているが, 歴史物はいずれ時期を見て是非とも教材として取り上げる必要と価値のあるものである。